

---

## UNCLEAR - アンクリア -

十八番。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

UNCLEAR - アンクリア -

### 【Nコード】

N1118D

### 【作者名】

十八番。

### 【あらすじ】

恐れられた力を持つ少年が仲間と共に世界を救うと言う、ファンタジーかつ友情・恋愛を含めた作品です。

## 序章（前書き）

この小説はあくまでも作者の自己満足で書かれているものです。

## 序章

新時代世紀末に作られたと言う新型ウイルス。

其れは、生命を壊死させる効能を持つウイルスを抹消する為に作られた物で、効能の威力は並外れた浄化消滅。

その為にこの新型ウイルスには最高ランクのDの値を付けられ、後にDウイルスと呼ばれるようになった。

此は全ての浄化ウイルスに言える事でもあるが、其れ等は生命体の体内に溶け込まれて初めて効能を発揮出来る。

其の為に浄化ウイルスは人間、又は動物と生命体の器に取り込ませいわゆる浄化兵器として其の存在を新たにした。

けれどDウイルスは余りにも威力が強すぎてしまい、取り込んだ自らの身体を浄化しようとしてしまう副作用を引き起こした。

強すぎる浄化は物質諸とも跡形も無く全てを消し去る。

その為、人体実験の犠牲者となる者達が後を絶たなかった。

だが其の中で唯一浄化されず一命を取り留めた者が漸く現れたのだ。

誰もが疑った驚愕の事実。

其れは、Dウイルスの器となった者がまだ生まれて間もない赤子だったからだ。

研究者達は大いに喜んだ。

しかし其の反面、恐怖感も抱き始めた。

時に浄化と言う白は汚染されやすくもあり、最悪の場合心身共に壊死してしまう現象が起こりうる。

まだ感情の不安定な小さき器なら、其の可能性が決して低いとは言えなかった。

威力を持った浄化ウイルスが壊死してしまえば、汚染と同時に爆発的な化学反応が起こる。

そして生まれるのは。

最強最悪の屍。

其の悪しき存在は世界を崩壊させるであらう。

救世主と死神。

正に其れは紙一重。

其の事から、愚かな人間達は其の存在を否定しようとした。

何も分からない小さな存在に向けられる氷のような冷たい視線と悪態。

人は言う。

奴は呪われた存在だと。

哀れな世界で。

愚かな人間達の悲しい戦いが始まる。



## 一章 Dウイルスの少年 - - - 一、出逢い

未来化が進む現代社会。

街は人と機械で活気に溢れている。

「コラー！待て、泥棒ー！」

男の声に何事かと立ち往生する人混みを掻き分けるかのように突き進む一人の少女。

腕にはパンや林檎、トマト等の食材が抱かれている。

人に体当たりをする勢いで走っている為に彼女の腕の中からはトマトがこぼれ落ちた。

「誰か其の小娘を捕まえてくれー！」

後ろの方で店主が怒鳴っている。

あのトマトは今頃人混みの中で無惨にも踏み潰されているだろう。  
少々勿体ない気もするが、今は止まってなどいられないのだ。

もし捕まれば、自分は冷たく閉ざされた牢獄行き。

そんなのはまっぴら御免だ。

そんな事を考えていたら、目の前に人影が現れた。

あまりにも急な事だった為に、此の勢いを止める事が出来ない。

此はぶつかると思い目をギュッと瞑った。

「…おっと…！大丈夫…？」

「わっ…。」

痛みなんて物は一切感じられなかった。

腕の中にある食材も無事だ。

其れも目の前に居る碧翠色の髪の少年が抱き止めてくれたからだろう。

碧翠色の髪とは対象の紅い瞳がやけに印象強い。

「…っ 離せ！」

今の自分の立場を思い出し我に返った少女は礼すら言っ前に彼の腕を振りほどいた。

おかげで林檎が地面に落ちる。

「君！其の子を押さえて！」

「っ……！」

林檎をすぐさま広い逃げようとした。

けれど林檎が無い。

気づけば彼の手の中に林檎はあった。

「……動かないで、じっとしてて……。」

「え……？」

「逃げるよ。」

少年は彼女の体を軽々と抱き上げ、其の場から瞬く間に消えた。

残された店主は息を上げ、悔しそつに地を蹴る。

「クソっ！あのガキ、“Dウイルス”の小僧だったのか…！」

人々は店主に哀れみの瞳を向けていた。

ただ、何も言わずに。

一方、無事逃れられた二人は人気の無い街外れに居た。

「…ありがとう…。…アンタ、瞬身使えるんだ…。」

「…瞬間…？…ああ、クイッキーの事が…。」

そこらにあつた石垣に腰を下ろし、不振げにこちらを見ている彼女を見上げた。

彼女はクイッキーと言つ言葉に反応を見せ、少々驚き気味に目を丸くする。

「クイッキー……アンタ、トリニティートの人間……？」

「いや、僕はまだトリニティートじゃないんだ。」

不思議な点はいくつもあつたが、彼の悪気も何も無い微笑みを見ているとそんな物はどうでも良く思えた。

## 二、ミストニモの人間

少年は、どこか独特の不思議なオーラを放っているように感じる。

碧翠色の髪もあまり見慣れないし、対象的な紅い瞳も何だか怖いぐらいだ。

でも彼はとても気の良い人間なのだろう。

そうでなかったら見ず知らずの、しかも泥棒の小娘なんて助けやしない。

「…君さ、さつきクイツキーの事…瞬身って言ってたよね…？もしかして、ミストニモの人…？」

「…そう…。私、ミストニモ出身の人間。半年前に移国してきた…。」

不自然な片言じみた喋り方も、ミストニモの特徴だった。

クイツキーのような瞬間移動も、ミストニモでは瞬身と呼ばれている。

ミスト二モは小さく貧しい国だ。

内乱も少なくは無いと言う治安の悪い場所でもあった。

「私の家、内乱で無くなった。家族も、みんな死んだ…。」

「……………」

近年では彼女のように内乱で家を失った者が、此処サイトニックに移国して来る事が多くなっていたのは事実だ。

「…ミスト二モの人間、サイトニックでは田舎者と馬鹿にされる…。仕事も、雇ってくれない…。」

「…だから盗みを…。」

「それでもしないと、生きられない…。」

蜜柑色の頭がうなだれる。



そんな彼女を不憫に思い、先程手に取った林檎を彼女の手におさめさせた。

「僕の名前はノア・スプライト。君は…？」

「…ヤズウ…。私の名前、ヤズウ。」

ノアと名乗る少年は微笑んだ。

けれど其の微笑みは悲しげなもの。

「ヤズウ、君は僕を見て普通に接してくれた…。久しぶりに人間らしくなれたよ。」

ヤズウはノアが何を言っているのかさっぱり分からなかった。

自分の目の前に居るノアと言う者は明らかに人間ではないか。

何が人間らしくなのだろう。

「もう君は僕のそばに居ない方が良い…。君の為に…。」

「何言ってる…？理解、出来ない…。」

「その内分かる。…僕は、危険なんだ。」

気がつくと、もうノアの姿は無かった。

ただ彼の悲しげな微笑みが頭から離れない。

ヤズウが彼の正体を知るまでに、時間はかからなかった。

### 三、トリニティ

あの日以来、ノアと言う少年には会っていない。

まだ聞きたい事も山ほどあったのだが、いくら探し回っても彼の姿は見つける事は出来なかった。

ヤズウは今日も盗み取った食材で腹を満たしている。

街は相変わらずの無機質な人ばかり。

人々はまるで機械の様に感情無く動いているように思われる。

「…なあ、聞いたか…？また屍達が現れ始めたらしい…。」

「それマジかよ…。暫く見かけなかったのにな…。」

とある建設ビルの踊場で社員の男二人が仕事の合間に休憩を取っていた。

煙草を一服しながら何やら深刻気な会話をしている。

たまたま其の場に居たヤズウは、建設ビルの一角から彼等の様子伺っていた。

「でも、トリニティが何とか進行を防いでくれるんだろ…？」

「いや、其れが今回はそうもいかないらしい…。事情までは分からないが、其のせいで確実に壊死化は進行してるとの噂だ…。」

「何だよそれ…。一体トリニティは何をやってるんだか…。」

会話の主旨は主にウイルスの感染で壊死化した屍達の事。

そして、白透派組織と呼ばれるトリニティ社の事だ。

「しっかりして貰わないと困るよな…。一応、奴等とともに太刀打ち出来るのはトリニティだけな訳だし…。」

「…だよな。トリニティは金も其れだけ入るんだしよ…。」

「一度の任務に数千万だろ？…やっぱり命が掛かるとなると違うのかね…。」

「トリニティート、金貰えるか？」

突拍子もなく割り込んできた片言混じりの声。

建設ビルの一角からひょっこりと蜜柑色の頭が出てきた。

当然ながら男二人は目を丸くしている。

「何だ、…お前は…。」

「トリニティート、沢山金貰えるか？」

「は…？…そりゃ、まあ…。」

「トリニティート、どうすればなれる！？」

ヤズウは目を輝かせて男二人に詰め寄る。

勿論、彼等は顔を引きつらせながら後退りさたが。

なかなか職につけないヤズウにとって、彼等の話は思いもしない儲け話でしかなかった。

「…トリニティは、トリニティの社員になって初めてそう呼ばれる名だ…。」

「そうそう…。其れに、トリニティに入るには入社試験に合格しないといけない…。」

「入社試験…?」

彼等の話によると、トリニティの社員になる為には毎年行われている入社試験を受けて合格しなければいけないらしい。

試験内容は基本的に、優れた身体技能や知能、銃剣技術等のスキルが審査される。

そして一般的に多く見られる失格事例が有り、其れはクイツキーが使えていないと言う物だった。

「何だ。なら私、合格する自信ある。」

「は…？正気か、お前…。」

「正気だ、正気。色々ありがとう。」と受け答えヤズウは其の場を後にした。

ヤズウの亡き父親は元々戦場に駆り出される兵の一人だった為、ヤズウは幼い頃から父親に様々な戦闘技術を学んでいた。

瞬身使いでもあった父親だったので、其の当時にクイツキーも身につけさせられたのだ。

力の消費にもなるし、決して目立たない技能な訳でもないのであまり人前では使わない様になっているようだが。

「…まずはトリニティ本社、行ってみるか…。」

ヤズウは小走りで其れらしき建物を探す事にした。

だが。

「逃げろー！感染者が居るぞー！」

世界の歪みは着々と進行していた。



#### 四、ウイルス感染者

ざわめつく街並み。

無機質なように思えた人々に驚きと恐怖の色が見え始める。

時折聞こえていた悲鳴も頻繁化してきた。

「早く此处から離れよう……！危ないぞ……！」

「まあ何て事、感染者だわ……！」

何の変哲も無い喫茶店の外テーブル。

人々は異様なまでに其の場を避けようとしている。

ヤズウは不審に思いながらも一人、人々の流れを逆流し事態を確認しようとした。

するとそこには、皿に盛り付けられている料理を貪るように食している一人の男がいる。

明らかに様子がおかしい。

まるで獣の様な動作で、人間らしさが感じられないのだ。

「…何だ、あれ…。」

本来の人間らしい肌の色は無くなり、まるで影の様に体全体が真っ黒に染められている。

歯は剥き出しになり、爪も鋭く尖っている。

もう此の者が同じ人間だったかすら危ういと思われる程。

しかし男の狂気に満ちた紅色の目は、どこか見覚えがある様に感じた。

「…っママー！ママ、どっっ…！」

まさかの事態だった。

此の異様な空間の中に居るのは、ヤズウと目の前にいる奇怪な男だけだとばかり思っていた。

しかし実際は幼い子供が喫茶店の中に取り残されていると言っ現状。子供の声に反応を見せた男は、口端から唾液を垂らしながら店内へと足を進めようとしている。

「…っ危ない…！」

このまま放って置けば、確実にあの子供は餌食となるだろう。

ヤズウはクイツキーを使い男よりも早く店内へ入り込んだ。

取り残され泣いていた子供を抱きしめ、再びクイツキーを使い逃げようとする。

だが、男は想像以上に近い場所に立っていた。

振り返れば襲いかかろうとする鋭い爪。

壊死化した感染者の攻撃は、受けてはいけけないのが絶対条件。

何故ならそこからウイルス感染が始まり、自分も壊死化してしまうからだ。

もう駄目だと思い、反射的に目をかたく閉じた。

子供だけは何とか守ろうと、抱きしめる力を強めて。

「……………っ……………あれ、…。」

「大丈夫…？ヤズウ。」

痛みはいくら経っても感じなかった。

目を瞑っている間に聞こえたのは、男の鈍い呻き声だ。

そして目を開けた瞬間、とても懐かしくも思える碧翠色の髪を見た。

## 五、悲しい存在

気付けば男は倒れていた。

刀で斬られた様な傷跡が胸部に有る。

ノアがそつと其の部分に触れると、肉体が灰屑の様に脆く崩れた。

「…ノ、ア……。」

「もう大丈夫。此の男のウイルスは浄化された…。」

幾つもの疑問が脳内を渦巻く。

其のせいで頭が混乱し、ただ何も言えず彼を見つめる事しか出来なかった。

「クリス…！ああ、無事で良かったわ…！さあ、早くこつちへ来なさい…！」

「…っママ…！」

店内に一人の女性が入って来た。

どうやら取り残されていた子供の母親だったようで、我が子の無事な姿を見た途端其の表情には涙が滲んでいた。

駆け寄る我が子を力強く抱きしめると、母親の瞳はノアを映す。

だが其の瞳は絶する程冷たい物だった。

「お前は悪魔の子よ…。お前の様な化け物が居るから、此の世はおかしくなるの…。」

御礼の言葉なんて物は一切無い。

有るのは相手を恨み、憎しむ心のみ。

「化け物が化け物を呼ぶ…。お前は厄介者でしかないんだわ…。」

母親は子連れて早々と店を出て行った。

ノアは無表情に立ち尽くし、ヤズウは呆然と座り込んでいる。

何とも居心地の悪い空気だ。

「…何で、ノア…悪く言われる…？ノア、何も悪くない…。」

「……………」

ヤズウには理解出来なかった。

ノアのおかげがあるからこそ、あの子供は助かっていたと言つのに何故あんな悪態をつかれるのか。

あの母親はノアを化け物と呼び、厄介者とまで言い放った。

一体、何を根拠に其の様な酷い言葉を浴びせるのか。



「…僕が、Dウイルスの器だからだよ。」

「え…？」

「ヤズウ、君も知ってるだろ…？Dウイルスの危険性を。」

軽く頷いた。

ミスト二モでも、新世紀末に誕生した浄化兵器Dウイルスの存在は  
かなり印象強い物だったからだ。

其の強すぎる浄化兵器の為に何人もの人の血が流れた事から、い  
つしかDウイルスは最も危険な物として人々の記憶に残った。

「此の浄化ウイルスのせいで多くの命が消えた…。」

「…人体実験…。」

「そう、人体実験で…。其の犠牲者となった人の親族達は、生き  
長らえた僕を恨んでるんだよ。」

ノアは無表情を装っていた。

彼の瞳は悲しみの色を見せる。

「おかしい……そんなの、おかしい……！何で恨まれる……？ノアも、被害者なのに……！」

「……仕方無いさ。みんな、自分の悲しみや怒りをどこにぶつけて良いのか分からないんだから……。」

「だから、何でノアなんだよ……！それじゃ、……ノアばかり、辛い思いする……。」

彼自身、Dウイルスの器になる事など望んではいなかった筈だ。

其れなのに、勝手に器とされ道具として扱われ同じ人間からは化け物呼ばわり。

あまりにも理不尽すぎる。

「僕の体は浄化兵器その物だ。…でも、いつコイツ等のように壊死化するかわからない…。」

友達、仲間、親族、恋人。

どれもこれも望んではいけないのだ。

大切な物を、己の手で壊してしまう事になる可能性も低くはないから。

「もう分かっただろう…？僕は繋がりを持つてはいけない存在なんだ。」

怖いのだ。

あまりにも脆すぎて。

触れる事すら許されないように。

## 六、繋がり

Dウイルスの器とされた少年、ノア・スプライト。

彼は壊死化ウイルスに汚染された哀れな存在達を抹消する為の浄化兵器として生まれた。

科学者達によるDウイルスを使った人体実験によって、多くの命が失われたのだ。

其れも全てDウイルスの効能が強大すぎた為。

人体実験の犠牲者となった者達は皆、Dウイルスの力に耐える事が出来ず消滅した。

細胞諸とも、無に還るのだ。

「…そう言えば、ヤズウ。君もクイッキーを使えたんだね。」

「…あ、うん…。」

ノアはヤズウの手を引き上げ、立たせた。

小さく礼を眩き彼の顔をまじつと見つめる。

「…どうかした…？」

「…噂、…。」

「噂…？」

「生き残った、赤子。」

ミストニモ国内で流れていた噂があった。

其れが“Dウイルスの人体実験で生き残った赤子”だ。

どんなに体のかい者だろうが、力の強い者だろうが皆Dウイルス相手では何の意味もなさなかった。

だが、たった一人だけ生き長らえた者が漸く現れたのだ。

其れがノア・スプライト。

まだ生まれて間もない赤子だった。

当然、人々は驚愕した。

そしてたちまち世界に其の話は広がったのだ。

「ノア、だった…。」

まさか此の少年が噂の当人だとは思ひもしなかった。

「ごめん…。もっと早くに言っておくべきだったね…。」

「……。」

「自分で関わりを持ってはいけないと言いながら、結局は求めている自分がいた。」

碧翠色の瞳が悲しく揺らぐ。

幼かったあの日々、多くの大切な繋がりを失った。

怖くて、怖くて。

自分が存在しているだけで誰かが消える。

死んでしまいたくてたまらなかった。

けれど其れは許されない選択肢であって、もうどうしようもなかったのだ。

ただ、あの頃誓った記憶。

一切の繋がりを捨て、孤独の闇に生きる。

「…ノア。私、ノア思ふ事間違ひ違ふと思ふ…」。

「……。」



「人間、独りじゃ生きていけない。必ずどこか繋がってる。」

ヤズウの言葉が、ノアの瞳に光を灯す。

「ノア、独り違う。」

「…ありがとう、ヤズウ。」

彼が見せた微笑みは少しでも暖かみを感じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1118d/>

---

UNCLEAR - アンクリア -

2010年10月19日20時05分発行